

博麗神社日々隨錄



博麗神社日々随録

雨水 陽氣地上に発し、雪水とけて雨水となればなり
啓蟄 陽氣地中にうごき、ちぢまる虫、穴をひらき出ればなり

目次

一	土脉潤起・前	雨水・初候	(雨が降って土が湿り気を含む)	3
二	土脉潤起・後			7
三	霞始 黷	雨水・次候	(霞がたなびき始める)	13
四	草木萌動・前	雨水・末候	(草木が芽吹き始める)	16
五	草木萌動・後			21
六	蟄虫啓戸	啓蟄・初候	(冬籠りの虫が出て来る)	25
七	桃始笑	啓蟄・次候	(桃の花が咲き始める)	28

一 土脉潤起・前

▲ 博麗神社 二月二十三日 ▼

春の苑 紅匂ふ 桃の花

下照る道に 出で立つ少女

(大伴家持)

暖かな風、揺れる梢、小鳥の囀り、香る花の芳。
遠く春の歓びに空を舞う、春告精の姿。

「よう、相変わらず暇そうだな。邪魔するぜ」

「——むにゃ」

蝶の羽ばたきに誘われたまどろみから引き戻されて、開いたまぶたの向こうには見慣れた白黒の服。

魔理沙は呆れ顔で私を見下ろしていた。

「お天道様が高いうちから高いびぎとは、いいご身分だな？」

「ちようどさつきひと仕事終わったとこよ。今は休憩中」

「嘘つけ。裏庭、草伸び放題だったぜ？」

「あつちは萃香の担当なのよ」

身体を起こすと、ちやぶ台に張り付いたほっぺたがべりべりと音を立てた。

「ん……っ、よく寝た」

「やつば寝てたんじゃないか」

縁側に腰掛けた魔理沙が小さく歯を見せて、ちよんちよんと頬を示す。

「ほれ、そこんとこ涎の跡ついてるぜ」

「うるさいわね」

思わず手をやった頬に、わずかに残る板の目の痕。

魔理沙はやれやれと首をすくめ、身を乗り出して食べかけだった最後のお饅頭をひよいと口に放り込む。

「むぐ。なんだな、もう春だつてのに、年頃の娘が口

クに色気もないのはどうなんだ？」

「年中辛気臭い格好のあんたに言われたくないわね」

「年中祝いの事やつに言われてもな」

「おめでたい事は多いほうがいいのよ。……それより、何か用事？」

「いんにゃ。ちつと帰り道に寄っただけだ。こつちもひと仕事して、喉渴いたんでな」

「どうやらその帰りということらしい。大きな鞆に詰め込まれた本の山は、本日の紅魔大図書館の損害を如

実に物語っていた。

「つてわけで、今度は熱い茶が一杯怖いな」

「……自分で淹れなさいそれくらい。台所くらい貸してあげるから。あ、私の分もお願ひね。ひと仕事して喉が渴いてるから」

「寝言は起きて言うもんじゃないぜ？」

言いながらも部屋に上がった魔理沙は、ためらいもなく。ぱたぱたと台所に駆けてゆく。

「さて、茶菓子とは、と。……なんだ、相変わらずロクなものがないな」

「そこで至極当たり前のように納戸まで漁られてることに疑問を抱くべきかしら」

「気にしたら負けだぜ」

ひとしきり探し回って、結局めぼしい収穫はなかったのか、魔理沙は茶葉と湯飲みだけを手に戻ってきた。畳の上に胡坐をかいてお茶を淹れはじめ。

「ま、昼間つかからスキマ妖怪みたいに贅沢言ってもしようがないか」

「そうね」

そこで魔理沙は、ん？ と眉を潜めた。くんと鼻を鳴らし、瞬きをしながらこちらの手にしていた湯飲みの中を覗き込んでくる。

「——つて、霊夢、なんだこれ？ 酒じゃないか」

「何つて、雛祭りでしょ。今日」

「桃の節句なら甘酒だろ？」

「甘酒と白酒は違うのよ」

たまに誤解があるが、酒糟から作る甘酒とは違って、白酒ははつきり酒精の入った酒だ。ちゃんと酔えるし、度を過ぎれば宿酔いにもなる。それでも萃香あたりに言わせると、成分の半分が味醂と大差ないので酒と認めたりしないそうなのだが。

「——いや、つていうかそもそも白くもないだろこれ。普通の酒じゃないか」

こちらから湯飲みをひったくり、胡乱な表情を浮かべる魔理沙。

「何言ってるの。白酒はもともとお神酒かみのひとつよ」

白酒は「しろき」と読み、本来神社の運営経費にあたる神田かみだの米を使つて作った酒のことを言う。

「だからこれも立派な白酒」

「神田つて、そんなもんあつたのか？ この神社。初耳だぜ」

「あのね、私が普段どうやって食べてると思つてるの？」

実に心外な話だ。というかそこに食いつくのか。

「いや、そりゃあ……まあなんとというか、普段の行状見てるとな。……というか待て。神様に捧げるもんだろ。勝手に呑んじまって構わないのか」

「うちのところの神様はわかりやすい格好してないからね。神様に捧げる分も巫女の私が代わりに呑んで、お相手するの」

「単にお前が一人で倍呑んでるだけだろう、それは」
「違うわ、神様が呑んでるのよ」

魔理沙の手の中から湯飲みを回収し、縁にそっと口をつける。喉を滑り落ちる甘露が、ほわりと心を暖める。

「ふう……」

「なんか昼間つから妙に幸せそうな顔してるなと思えばコレか？ 確かお前、まえにブン屋の取材だかなんだかで神社じゃ酒造りはしてないって答えてなかったっけか」

「あら。これは神様がつくったのよ、勝手に……。なんだか文句が多いみたいだけど、要らないなら無理に勧めないわよ？」

「ああいやいや、そうだな確かに神様のお恵みだな。感謝してご相伴に預かるとするぜ」

一息にお茶を飲み干して、空になった湯飲みを差し

出してくる魔理沙。

まあ、実に調子のいいことで。

「はい」

「お、さんきゆな」

自分の湯飲みも白酒で満たし、軽く乾杯。

くいと煽った酒精が喉を落ちてゆく。ひんやりとした感触が胃にひろがって、すぐにかあつと熱くなつた。

「ん……美味し」

「だな」

倅なまこうように湯飲みを傾けた魔理沙が、目をきゆうつと閉じてつぶやく。

見上げれば穏やかに広がる春の空。

ほんのりと春の香りを乗せた風が、さあ、と吹き抜けてゆく。

「これで、ひし餅かひなあれでもありやちようどいんだがな」

「少しは遠慮しなさい」

「してなきや勝手に食ってるぜ？」

勝手知ったる他人の家とばかりくつろいでいて、その台詞もどうかと思うけれど。

「本当、色気より食い気ね」

「失礼なやつだな。お前と一緒にするな」

「そう？」

「当たり前だぜ」

ぷう、と膨れる魔理沙。自称、恋の魔法使いとしてはそれなりに矜持でもあるのだろうか。

拗ねた表情がなんとなくおかしくて、軽く吐息。

「まあ、確かに折角の日に何もそれらしいことしないつてのも勿体無いわね」

「？ どこ行くんだ霊夢？」

「風流を嗜むのよ」

縁側に下り、庭に植わった桃の枝に手を添える。

桜折る馬鹿、梅折らぬ馬鹿と言うが、桃は桜と同じだという。薄紅に咲いた花を軽く摘み、ちよん、と湯

飲みの中に散らした。

「はい、あんたの分」

「……なんだこれ？」

「これが本物の桃の節句のお酒よ」

刻んだ桃の花の甘い香りが、ふわ、と広がってゆく。

桃花酒としかといい、仙人なんかが好きで飲んだそうとだ。

桃はすなわち百もに通じ、邪気を払い長命を願うものであるという。

「天界の桃だから、効き目も折り紙付きじゃないかし

ら」

「成る程な、確かに風流だぜ。余計な効果もありそうだけどな」

無邪気に笑う魔理沙を見て、

私も苦笑と共に、湯飲みに口をつけた。

(了)

二 土脉潤起・後

▲ 博麗神社 二月二十三日 ▼

「……ん？」

と、顔を上げたのは魔理沙のほうだった。燦々と注ぐ春の日差しに手をかざし、目を細めて空を見上げる。

「霊夢、客人だぜ」

「そうね」

ふわり、と風がそよぐ。ちいさな春の匂いをほのかに香らせ、緑と白に彩られた少女は、風を纏いながら優雅に舞い降りる。

袖に縫い取られた鈴がしゃんと鳴り、涼やかな音色が周囲の気配を清浄なものへと変えてゆく。

「——思うんだが、あれが世にあるべき巫女の姿じゃないか？ 少なくとも昼間つから呑んで寝転がってるのは違うと思うぜ」

「人のこと言える格好じゃないじゃない、あんたも」

「ぺしん、と軽くおでこをはたいて、余計な一言を挟んできた魔理沙を黙らせた。」

「お邪魔します」

律儀にぺこりと頭を下げるのは、山の上の神社の巫女、東風谷早苗の挨拶。

こちらに来た頃は逢うたびにいつも緊張にばきばきと全身を強張らせていたものだったが、最近の色々とこちらにも馴染んできたようで何よりだ。

……少々馴染みすぎている風もあるのがやや気にはなるけれど。

「よう、早苗」

「なにか用事？」

「ええ、大したことではないんですけど……お邪魔でしたか？」

困ったように聞いてくるのは、多分魔理沙が私の膝枕の上にいるからだろう。ちゃぶ台の上に飲み散らかしていた湯飲みと酒精を見つけて、その様子はさらに深まる。

「いんや。退屈してたから呑んでただけだぜ」

「魔理沙の嫁入りの話よ」

「誰がだ」

起き上がった魔理沙を見ても、早苗は困惑の表情を崩さなかった。眉を下げて申し訳なさそうに聞いてくる。

「——あの、ひよっとして本当にお邪魔でしたか？」

「そんなことないぜ。なあ霊夢」

「……そうね」

「そういう霊夢、嫁入りつて言えばフランの奴紹介して随分経つのに、どうしてまだ結婚してないんだ？」

「意味が解らないわ」

吐息と共に、湯飲みに残っていた桃花酒を飲み干す。
「雛祭りだから、白酒をちよつとね。……それよりに、お遣いかなにか？」

「え、ああ、はい。これ、ちらし寿司です。ちよつと作りすぎちゃって、お裾分けに」

「山の上からわざわざ？」

「いろいろお世話になってますから」

はにかむような笑顔を見せる早苗に、魔理沙は驚愕の表情でしばし硬直。その後、ぎぎぎ、と首を軋ませこちらを振り向いて、

「……見る霊夢、これがまさに世にあるべき巫女の姿だぜ？」

「だからうるさいってのに。その顔腹立つからやめなさい」

魔理沙を押ししのけ、早苗の差し出す包みを受け取った。

山葵の風呂敷に包まれたずっしりと重いお重の蓋を開けてみれば、中には干し椎茸、干瓢、蓮根、筍。彩りには人參に錦糸玉子、胡瓜の薄切り。添えられた薄紅は、桜の花の甘酢漬けだろう。その香りがさらに食欲をそそった。

「おお、豪華だなこりゃあ」

「ハレの日ですから、ちよつと張り切りすぎちゃいました」

はにかむ仕草もどこか愉しげだった。魔理沙はちよいと桜の甘酢漬けをつまみ、口へと運ぶ。

「うむ、美味しいな。もうそっちじゃ桜まで咲いてるのか？」

「はい、庭に一本だけですけど。これも加奈子様の信仰のお力です」

「大したもんだぜ。どこぞのぐーたら巫女とはえらい違いだ。じゃあ、そのうち花見もできるかもな」

「ええ、ぜひお越しください」

にこにこ——もしあれが営業用スマイルであるなら大したものだ——頷く早苗。

「なんにせよありがたいぜ。食うもんが欲しかったとこなんだ。折角だからご相伴に預かるとするか。おい霊夢、皿とか箸どこだ？」

「いつものとこよ」

「応」

鼻歌と共に出て行った魔理沙を見送りつつ、溜息。

「あんたも上がっていきなさい」

「え、結構ですよ、折角おふたりでいるのに、お邪魔しちゃ」

「何にもせずに追い返したんじゃそれこそウチの沽券に関わるのよ。只でさえ初詣でいろいろ思い知らされたんだから」

「あ、あはは……」

苦笑いの早苗をひっぱり上げると、すぐに魔理沙が食器をもつて戻ってくる。そのまま二人、ちゃぶ台を囲んで少し早めの昼食となった。

「本当に美味しいな。これ早苗が作ったのか？」

「はい、習いたてですけど」

「お世辞抜きでよくできてるぜ。これならいい嫁になれるな」

「そ、そんなつ」

かあ、と頬を赤くする早苗。

つくづく免疫のない娘だなあと思った。外の世界と違うのは、そんなに色恋と縁の遠い場所なのだろうか。「……早苗、気をつけなさいね。油断しているとあんた

もいろいろ大変なものまで盗まれて、あとで泣きを見るわよ」

「あのなあ。心外だぜ。いつそんなことしたんだ私が？」

むぐむぐとちらし寿司をかき込みながら、器用に頬を膨らませる魔理沙。

「ええと……そう言えば、その、さっき、お嫁さんがどうって……」

「ちよつとね。雛人形の話よ。こいつが厄払いでもしたらどうかってしつこいから。神社に厄払いを勧めるってどういうことかしらね」

「そんで流し雛から雛人形の話になつてな。どうせだから雛壇でも飾って人呼んだらどうだって話してたんだが」

「それでお嫁入りのお話に？」

ほん、と手を叩いて応じる早苗。

「あんなのただの迷信よ。片付けなくてもカビるだけだもの。非科学的よ」

「いや霊夢、いつぺん自分の仕事見ながら喋ったほうがいいぜ？」

「ええと……その、そう言えば前から気になっていたんですけど」

なんとなく居心地悪そうにしながら、早苗は畳をむしりつつ、上目遣いにこちらを窺ってくる。

「お二人とも、その……こ、恋人とかいらつしやるんですか？」

「……………」
「……………」

そんなことを聞いてきた早苗に、思わず魔理沙とふたり、顔を見合せ。

「別に？」

揃って同じ答えを返す。

「まったくそんな予定はないぜ？」

「あのさ、私はともかくもあんたはそれでいいの？
恋の魔法使いでしょ、確か」

「私は普通だぜ。あと、恋と愛は別物だからな」

意外に世知辛い回答を、なぜか胸を張って答える魔理沙。

「で、なんで急にそんなこと聞こうと思ったわけ？」

「あ、いえ、そのつ、全然たいしたことではないんですよ？ その、ちよつと興味があつたつていうだけで、本当に深い意味はぜんぜんないです、ええつ、忘れてくださいっ！」

すぐく解りやすかつた。

「ん、誰か好きな奴でもできたのか？」

「い、いえつ！ 違います違いますつ。他意はないんです、決して！ 断じてそんなことはっ」

ぶんぶんと首を振り、必死で否定を繰り返す風祝。なんとなくだけどブン屋の気分はわかつた気がした。

とはいえ、それで聞くなというほうもどうかと思うので、さらに問い詰める手は緩めない。

やがて早苗も観念したか、ぼつりぼつりと話し出した。

「うー……その、本当に大したことじゃないんですけど、幻想郷つて、外の世界といろいろ違うところも多くてですね。これまでの常識じゃ考えられないことに直面して困つたりもするんですよ。あの、それで……ここだと、お二人くらいの歳でもええと……その、け、結婚とかを考えるのかなあ……と」

「結婚ねえ。私は見ての通りだから違うけど、里のほうじゃたしか結構そんなものね。外つて違うの？」

「えつと……とりあえず、私くらいの年齢なら少なくともあと10年くらいは先のことかと」

「へー、じゃあ外の世界じゃ行き遅れはいないのか」「やつぱりそうなのね」

感心したように声を上げる魔理沙。

よほど特殊な事情でもなければ（吸血鬼のメイドを務めるとか）、たいていはどこかに嫁ぐのが一般的だ。

「いえ、それでもいろいろ苦労はあるみたいなんですけど……」

視線を泳がせ、言葉を濁す早苗。外の世界もいろいろあるということか。

「で、結婚がどうしたんだ？ 誰かと見合いでもするのか、早苗？」

「ちちち違いますっ。その、結婚なんてまだ早いですっ。ええとですね、その、それで、うちの神様のことは確かですけど——加奈子様と諏訪子様は、もともとは……と、とつても親密になさっている時がありました。たまにその、そういう場面に出くわしてしまつと、巫女としてとても気まずいと言いますか……」

「ああ。いわゆるひとつの夜の諏訪大戦ね」

「乙だぜ」

さりげなく先日の新聞の一面を取り出しつつ、慰めてみる。

「親指とか立てなくていいですからっ！ ……つてその新聞取つてあつたんですかっ？ か、返してくだ

さいはやくつ、今すぐにつ！」

数ヶ月前にスクープされた一件であつたり。

ぺたり、とちやぶ台につつぷして、早苗は滂沱の涙を流す。

「ううう……幻想郷はやつぱり怖いところですよ……」

「なまじカタチのある神様つてのも大変ね。愉快な神様でよかつたじゃない。毎晩賑やかで。主に性的な意味で」

「よ、良くないですよっ！」

「ところで話は変わるけど蛇と蛙だとやつぱり蛇のほうが一方的に食べるほうなの？」

「いえあの、どちらかと言うと夜は諏訪子様のほうがなにぶんミシヤグジ様ですし……じゃなくてっ！」

ばんつ、とちやぶ台を叩いて誤魔化す早苗。

「まあつまり、それが気になるってことか。なあ、表じゃそういうの普通なのか？」

「その、なにぶん神様なので、一般的なのかどうかは……。ええと、こつちに来る前は、そういうのつてかなり特殊なんだと思つてたんですが、その……幻想郷だと意外に、そうでもないのかな、と……」

「ちらちらと魔理沙の方などを窺いつつ言ってくる。ん、なんのことだ？」

「ああ、期待しても無駄よ。こいつそーゆうの徹底的に鈍いから」

「おいおい霊夢、なんか知らんが私の悪口は無しだぜ」

口を尖らせる魔理沙に、軽く肩をすくめてみせる。

「ね？」

「はあ……」

微妙な表情で曖昧に答えを濁す早苗を見て、魔理沙はまだ不満そうだった。

(了)

三 霞始隼

▲ 博麗神社 二月二十八日 ▼

「今日も一日が始まる。」

幻想郷の楽園の巫女とて、なにも異変解決妖怪退治だけしていれば生きていけるわけでもない。仙人でもあるまいし霞を食べておなか膨れるわけでもなく、日々の糧を稼ぐためにはやはりどうしても世間さまのあれこれ、浮世の沙汰と無縁であるわけにはいかないのである。残念なことに。

「さて……」

日課であるところの境内の掃除に蔵の整理、神田の手入れに宴会の後片付け。暇だ暇だぐーたら巫女だと言われながらも、自由な時間など存外に無いものだ。

しかしこれも巫女のつとめ。薄暗い障子の中、眠気を追い払って寝間着から着替え、ひとつ軽く頬を叩いて気合を入れる。

「ここしばらく、本調子でもなかったことだし。」

「今日も頑張るとしましょうか——」

んんっ、と伸びをして丸まった背中を伸ばし、深呼吸。

ふう、と目元の涙をぬぐい、ちらりと外を見やれば、さらさらと降り続く雨。春の雨は境内の向こうの景色をぼうと霞ませて、静かに静かに降り注いでいた。

「……………」

そう言えば、昨夜あたりから屋根裏で雨音が聞こえていたことを今更のように思い出す。再建されたばかりの神社だが、居住部分は前のままのため雨漏りは直っていないのだ。

「……………雨、か」

境内を囲む緑の梢は、静謐な気配に満ちていた。結界の此方と彼方を繋ぐ境界の社、そこを包む霞のような春雫を眺め、私は吐息と共に縁側に降りる。

しっとりとした髪を潤わせる春の雨は、ほんのすこしひんやりと、肌を濡らし、指先へと滑り落ちる。

それをしっかと見届け、

がらがら、と雨戸を戸袋から引き出して閉め、額の汗をぬぐった。

「ふう。良く働いたわ」

「早ッ」

わざわざ台所から顔を覗かせて、割烹着姿の魔理沙

が声を荒げる。

「いや霊夢、いくらなんでも諦めるの早すぎだろ。常識的に考えて」

「だって雨よ？ せつかくやる気出したのに嫌になるわ。明日から本気出すから」

「ああおいコラ寝るな。横になるなっ」

「むにゃ」

「寝るなーっ！」

駆け寄ってきた魔理沙を見上げ、重たい左右の目蓋を擦る。

「……なによ、私だって精一杯やったわよ。ここ一年で一番くらい一生懸命頑張ったわよ。気持ちだけは」

「本当に気持ちだけな。せめて家から一歩くらい出てから言ってくれ」

「……えー」

「えーじゃないっ。どこぞの死神でももう少しやる気くらいは見せろと思うぜ？」

「む」

あのサボタージュの泰斗と一緒にされるとは心外だ。

「別に誰に迷惑かかってもないからいいじゃないの。こういう天気の良い日なんてどうせ無理して外に出

てもなにひとついいことないんだから。掃除とかいつでもできるんだから、お茶でも飲んでゆっくりしてるのがいいのよ」

「だから霊夢、お前、神徳とかなんというか、もう少し巫女の自覚を持ったほうがいいぜ？」

「あーあー聞こえなーい」

うるさい魔理沙を押しわけ、一旦台所に寄って自分の湯飲みを用意。急須を回収しお茶の間に戻って座布団の上に。

「ふう……」

……お茶がおいしい。

「いい汗かいたわ。ねえ魔理沙、お茶菓子なかったかしら」

「あー、霊夢？ そこは明らかに一仕事やり遂げた充実感みたいな雰囲気出す部分じゃないと思うんだが。誤魔化すんならもう少し徹底しろと言うかだな。……」

「……」

「……」

「……」

「うるさいわねえ……」

「いや、そこで私が文句言われるような筋合いは断じてないぜ」

「いいじゃない、たまの雨の日ぐらいゆっくりさせてよ。ここんとこあんまり食べれてないし」

「夕飯あんだけ大喰らいしてたの誰だ。なんだかんだでここの一週間くらいちよくちよく来てるが、いまんとこお前が真面目に巫女の仕事してるの見たことないんだが」

「今日は色々とあんたの番でしょ。あんなに派手に負けるとして」

「そんな事実はなかったと記憶してるぜ？」

「もう、文句ばかりなんだから。しょうがないわね」
「そこまで言われたら流石に重い腰を上げざるを得ない。席を立ち、納戸から脚立を引きずって、柱にかかるカレンダーの前に。」

「ペリペリ、と一枚をめくり。」

「……………これだよし。今日も良く働いたわ」

「いやだから全然よくないぜ？ こら、爽やかな顔で納得するな爽やかな顔で。額の汗を拭うな。というかそれごときで疲れるなっ」

「今日もよく働いたわ……………」

「とても大事なことなので二回言いました。」

「それで心底問題ないと思えるお前がたまに怖くなるぜ……………」

「恐々と汗を拭う魔理沙。」

「どう、思い知った？」

「だから胸を張るな胸を。ロクに無いくせに」
「半眼の視線がものすごく冷たい。」

「しばし、沈黙。」

「……………」

「……………」

「さらししばし。」

「間が持たなかったので湯飲みを差し出してみる。」

「……………お茶、飲む？」

「せめて片付けくらいは手伝え」

「ぺしん、と顔に台布巾が投げつけられる。」

「ともあれ。雨は止みそうにない。」

(了)

四 草木萌動・前

▲ 博麗神社 三月一日 ▼

(寒……)

ぼんやりとした頭で寝返りを打つ。汗で湿った布団が冷えて気色悪い。昨日よりいくらかましかと思つたが、次の瞬間咳がこみ上げてきて、しばしの後に思い直す。

(おなかすいた……)

「ぜい、と息を吐くたびに不快な音が喉を鳴らす。

こんな時でも飢えを訴える正直な身体に半分呆れるが、起き上がろうにも手足に力が入らない。布団から入り込む隙間風に指先が凍えている有様では、台所までたどり着く前に倒れそうだった。

「お、起きたか?」

ふいに自分以外の声が聞こえ、私はふと目を開けた。熱でぼんやりした視界の向こうに、いつもの白黒のシルエツト。

「誰よ……? 勝手に上がりこんで」

「ご挨拶だな」

幾分怒つたような顔で、魔理沙は布団の側からこちらの顔を覗きこんでくる。

「桃の節句だつてのに不景気じゃないか。昨日も一昨日もいくら呼んでも返事もないからどっか出掛けると思つてたんだが、まさかずっと寝てたのか?」

「あ……」

おぼろげな記憶の糸を辿ってみるに、確かに寝込んでからそれくらい経っている気がした。

「具合悪いなら無理強いはしないが、せめて養生ぐらいした方がいいぜ」

「寝てれば直ると思つたのよ」

喋るたびに喉に痛みがあった。思わず顔をしかめてごぼごぼと咳き込んだ私の背中に、ぽんぽんと手が添えられる。

「無理するな、折角来てやつてるんだから」

布団に戻され、掛け布団が乗せられる。されるがままに魔理沙に従う。

ひんやりとした指が額に触れた。火照った顔には、外を飛んできて冷えている魔理沙の手のひらが心地よかった。

「寒気はあるか? 汗は? あー、こりやかなり重症

だな。医者はどうした、医者はい

「——だから、寝てれば直ると思つたのよ」

「やっぱ飢えてたか。食うもの食わずに病気は治らな
いぜ」

見透かしたように言う魔理沙。タイミングの悪いこ
とに、正直なおなかがかくうと音を立てた。

「もうすぐ祭りなんだから、それまでにちゃんと治せ。
その分の世話くらいは焼いてやるぜ。台所借りる
ぞ?」

「……好きにして」

魔理沙は割烹着を着て台所に向かう。すぐに包丁の
音と、かまどに火が入る気配。

てきぱきと準備を進める魔理沙の背中を、ぼうつと
ながめる。

「しかし、お前が風邪なんて珍しいな。どんだけ貧窮
しても健康が巫女のとりえだろうに」

「私だって調子悪い時くらいあるわよ」

「呆れたもんだ。巫女の霍乱つてやつか」

「ヘンな言葉作らないでくれる?」

そつと寝返りを打とうとすると、身体の節々が嫌な
痛みを上げて、思わず顔をしかめてしまう。

「で、鬼つて言えばその葦香はどこだ?」

「あー、確か、一昨日の朝っぱらに大騒ぎして、葉探
してくるつて出てつたきり。大方永遠亭の前に竹林で
迷つてるんじゃない?」

「成る程、鬼じゃ幸せ鬼もサービス外だな」

締め切った部屋の隅では、魔理沙の八卦炉が小さく
音を立てている。

いつのまにか、随分と寒さは和らいでいた。

「起きれそうなら起きとけ。その方が食えるようにな
るだろ」

「……そうね」

答えながらも、だるい身体に力が入らない。

せめて顔くらい洗おうかと思いつつも、億劫で動け
ないでいるうちに、魔理沙は小さな椀をこちらに運ん
できた。

「しかし、ホントに何にもないなここの台所」

「うるさいわね」

「怒ると熱上がるぜ、食えるか?」

「ちゃんと食べられるものが入ってるならね」

「美味いぜ? 特製の茸雑炊だ。効能も万全、滋養強
壮・元氣回復・体質改善・出前迅速・落書無用だぜ」

わずかに出汁の風味の香るそれは、ただのお粥より
もだいぶ食欲を刺激した。蓋を開けた椀を手に、魔理

沙が側に寄ってくる。

「ほれ、起きれるか？」

「ん、平気……」

まだ少々頭がふらつくが、あまり世話を焼かれてばかりでは格好が付かないので、多少強がりも入れて身体を起こした。半纏に袖を通して咳を堪えていると、魔理沙は椀と匙を手に笑顔。

「ほれ、あーん」

「……いいわよ、一人で食べられるから」

「無理するなよ」

「平気だって言ってるでしょ」

意地を張っているのが自分でもわかるほどの声の有様。にやにやと笑っている魔理沙から椀を奪い取って、口に運ぶ。

舌の上に広がる卵の風味と、薄味の出汁。小さく刻んで柔らかく煮られた茸も、意図せずに喉に落ちてゆく。

「……美味しい」

「そうか。飯が美味けりやそんなに心配することはないな。がつつかずに落ち着いて食え？」

「ひとを意地汚いみたいに言わないでよね。……これ茸のほか他に何か入れたでしょ」

「隠し味を少々な。葱白と紫蘇子、生姜なんぞだ。ま、漢方なんて大したもんじゃないが媚薬じゃないから安心していいぜ」

「馬鹿言うな」

そんなやりとりの間にもあつという間に椀が空になって、ちらりと見れば、魔理沙は歯を見せてこちらを見ていた。

「お代わり」

「応」

もともと予想済みか、台所に戻った魔理沙はすぐにもうひと椀を持ってくる。

「なんだ、すごい食いつぶりだな。ひよつとして本当に全然食べてないのか？」

「……食欲なくてね」

「よく言うぜ。ま、お前はいつも飢えてるんだろが」

「うるさいわね」

「違う、と否定できないところはやや悲しい。

「まあ、流石に全部は食いすぎだろうから適当なとこでやめとけ。寝て起きたらまた食えばいいだろ」

言われながらも、二杯目を空にしたところで。

「さて、お次だぜ」

満面の笑顔と共にやってきた魔理沙は、桶に満たし

たお湯と手ぬぐいを抱えていた。

「……ひとが弱ってるのにつけ込んで何するつもりよ」

「おいおい人聞きの悪いこと言うなって。一人でできないだろうから世話焼いてやってるってのに。脱げるか？」

「ちよつと、そこまでしなくたっていいってば」

「いいからいいから」

「良くないっ」

とは言え、弱つたまま魔理沙を跳ね除けられるわけもなく。

なすすべなく脱がされた私の背中に、暖かい濡れ手拭いの感触が触れてゆく。少々丁寧さには欠けていたが、悪い気分ではない。強張った背中と肩の筋がほぐれ、気持ち悪さが消えていく。

「たまに思うが、寒いんならあの服やめたらいいと思わうぜ。つかなんであれ袖しかないんだ？ 昔は普通の巫女服着てただろ、確か」

「……深い訳があるのよ」

忘れもしない紅霧異変の時だ。新しく服を新調する段になって、直面した問題。つまり、神社の慢性的な信仰（賽銭）不足と言う困窮した経済事情だ。

「布地が少なければ、その分だけ安くなるのよ……っ！」

「すまん帰っていいか？」

「な、なによ、あの時は切実だったのよ」

「いやそこで切れられても困るんだぜ」

今にしてもあれは避けようのない決断だったと思う。後の春雪異変の時に死ぬほど後悔することになったけれど。

一回着てみればもうそれが当たり前のように接されて、博麗の巫女のトレードマークとなった今、いまさら元に戻せるわけもないのだった。

「あれでも一応冬服なんだけどね」

「どこがだ」

「生地が厚手なのよ」

「あのな……」

苦笑しつつ魔理沙は、手際よく私の身体を拭ってゆく。

鎖骨から首筋に押し当てられる濡れ手拭いが、気持ちの悪い汗を拭い落とし、熱を穏やかに和らげる。背中から回り込んだ手ぬぐいは鎖骨を滑り、さらに下に降りて――

「……にしても霊夢、貧相なのは神社だけにしといた

ほうがいいぜ。これじゃどつちが前か後ろかわかりやしない」

「やかましい。人のこと言える立場じゃないでしょ。前くらい自分でやるわよ」

へしり、と余計なことを口にした魔理沙のおでこを叩き、手拭いを剥ぎ取った。

(了)

五 草木萌動・後

▲ 博麗神社 三月二日 ▼

静閑とともに満ちる夜闇。灯りのない夜の向こうで、
雨戸かカタカタと風に揺れる。

三日ぶりにお腹も満たされ、身体も温まり、寝間着も着替え布団のシーツも変えて、あとはゆっくり休むだけ……なのだが。

「……………」

「昼間、春眠を貪りすぎたせいか、いくら経っても眠気はまったくやって来ない。そろそろ日付も変わろう頃だというのに、まどろむこともできないまま、ただ目を閉じているだけだった。」

隣では魔理沙が、仕舞い込んでいたコタツ布団を引っ張り出して包まっている。強引に泊まって行くと言い出した彼女を、結局私は断りきれずにいた。

「……飛べない巫女はただの巫女ね」

「眠れないのか？」

「なんだ、起きてたの？」

「まあな」

顔を傾ければ、コタツ布団から顔を出した魔理沙と目が合う。

「こんなふうにまじまじと見詰め合うのなんか、何年ぶりだろう。」

「おかしなことという奴だな。飛べても飛べなくても巫女は巫女だろう」

「そうじゃないのよ」

「わかっていない様子の魔理沙に、はあ、と溜息。」

「飛べない魔法使いは普通の魔法使い？」

「……違うな」

「でしょ」

「ああ」

「そういうことよ、とつぶやいて、肩に布団をかき寄せる。博麗の巫女がこの有様じゃ、実に格好が付かない。まあ、つまりはそういうことなのだ。」

「……………」

「……………」

そのまま言葉が途切れる。窓の外では雨戸が軋み、静閑な闇を揺らす。

しばらく目を閉じることなく、ぼんやりと天井を見ていると、不意に魔理沙はがばりと身を起こした。

「あー、やっぱだめだぜ、寒い」

「だから言ったでしょ。ちゃんと客用の布団あるんだから、そっち出しなさいよ」

「いや、今さら面倒だぜ」

薄闇の中、ごそごそとコタツ布団の塊がこちらに這い寄ってくる。

「ちよっと、入ってこないでつば。感染しても知らないわよ」

「どうせ風邪引くならあったかいほうがいいからな」
隣にもぐりこんできた魔理沙の、やけに熱い指先が、そっと手の甲に触れた。

「……なんだよ、こつちも冷たいじゃないか」

「しょうがないじゃない、風邪ひいてるんだもの」

「普通風邪ひいてりゃ熱あるもんだろう。行火あんかでも持つて来るか？」

「いいわよ別に」

答えて、ころんと寝返りを打つ。

とんと、と背中に触れる魔理沙の気配。すぐそばに感じる彼女の呼吸が、やけに耳について離れなかった。

「魔理沙」

「ん？」

「私、お風呂入ってないから。髪とか汗臭くない？」

「……いや」

「別に、どうともないな」

「そう」

いい匂いだ、とか言われたらぶん殴ってやろうと思つていたが。

ひゆう、と雨戸の向こうでいちだんと強い風が吹く。いまさら春一番でもないだろうが、空気がわずかに重くなっているような気がした。

「風、出てきたな……また雨でも降るかね」

「かもね」

「無理して泊まってくこともなかったんじゃないかしら」

「病人ほっとくのも寝覚め悪いだろ。……ま、それに今、家もちつと戻れる状況じゃないんでな」

「妙な実験に失敗して爆発でもしたのね」

「ま、そんなとこだ。そういうことにしとけ」

ああ。

下手な嘘だな、と思つた。

「泊まってくだけなら他にもあるでしょう。人形遣いに図書館に、色々。たぶんどこも歓迎してくれるわよ、きつと」

「勘弁してくれ霊夢。どつちもえらく高くつくぜ」

苦笑する魔理沙。

「それにどうせパチュリーの所はメイドに追い出されるし、アリスにはそれこそ何されるか解ったもんじやないからな。お前のところが一番楽だ」

「そう」

「なにしろ今弱ってるからな。恩を売るのは絶好のチャンスだけ」

「うるさい、ひつつくな」

「あー、あと、それにな」

「ついでのように付け足して。」

「なに？」

「ふたりとも、この前の桃花酒の件を話したら、いきなり叩き出されてな」

「……そう」

「ま、なんだ。慣れないことするもんじやないと思う

ぜ？ そんなだから風邪ひくんぞだ」

「……そうかもね」

「すん、と布団に鼻先を擦り付けて、喉奥に引つかかった言葉を飲み込む。声が少し尖ってしまったのは、仕方ないことだろう。」

「思ってたよりずっと性格悪いわ、あんた。今気付いたけど」

「お前に嫌がらせのできる機会なんか滅多にないからな。仕返しだけ」

「はあ、と吐息。言いたい言葉を飲み込んだ喉がわずかに、乾いて痛んだ。」

「みんな苦労するわけね」

「酷い言われようだけ。人の嫌がることを進んでしましよう、つてのが我が家の家訓なんだがな」

「最低な家ね」

「ああ。最低な家だ」

魔理沙はくす、と小さく笑みを浮かべ、

「これでも地元じゃご近所さんでも評判の娘だったんだぞ？ 箱入りに蝶と花よと育てられて、毎年雛壇片付けるのも十日過ぎてからでな」

「良かったじゃない、立派にいき遅れてるわよ？」

「おまけに親不孝だ」

「この先何があってもあんたの実家近くに引越すことはないようにするわ」

「そりや賢明だけ」

「重なった手のひらに、そっと力が籠められる。すぐ隣の魔理沙の気配が、布団の下のわずかな隙間を埋めてくる。」

けれど、振り払う気にはなぜかなれず、そのまま私

は目を閉じた。

「まあでも、悪くないから、しばらくこのままでお願
いね」

「……ああ」

ぼた、ぼた、と表で雨音が響き始める。

ひとりの夜は、心細くなつてしまうからと、そんな
言い訳もできないことは無いけれど。

まあ、たぶん病の夜の気の迷いだ。そういうことに
しておこうと思う。

髪の上に顔を寄せた魔理沙が、すん、と鼻を鳴らす。

「なあ、明日は風呂入れよ、霊夢」

「……今さら言うな馬鹿」

気が抜けていたので、軽く額を小突く程度でやめて
おいた。

(了)

六 蟄虫啓戸

▲ 博麗神社 三月六日 ▼

「最後の一枚、もらうぜ」

「ちよつと、取らないでよ」

「全部私が買って来たんだぜ?」

「じゃあ半分こ」

「……お前なあ」

ほわほわと湯気をたてるお茶を脇に、ちやぶ台に向かいぱらぱらと図書館からの収穫物らしき本の頁を捲りながらお煎餅を齧っていた魔理沙が、眉をしかめて顔を上げる。

「この前寝込んでからぐーたらに拍車かかつてないか? もちつとしゃっきりしろ。祭り終わったらだらけやがつて。寝ながら食うと牛になるぜ霊夢」

「そんなの迷信よ」

「だからお前は一度自分の職業を確認してから喋れ」
かなわんぜ、とぼやきつつも差し出された半月型のお煎餅を、ぱりんと口に啞え、折り畳んだ座布団を枕

に、手足を伸ばして茶の間に転がる。

焼けた古いイグサの匂いに身体から力が抜けてゆく。春のお日様に照らされた畳は、これ以上ない睡魔の誘惑だ。

「暇ね……」

「ああ。徹底して暇だな。おつそろしいくらい。本つ当に冗談抜きで誰も来なかったなこの一週間。宴会無いとこんなに誰もいないのかここ。良くこれで潰れないな、この神社……」

「……というかあんたいつまで居るつもり?」

「お前なあ、一週間ほどとんどまるまる掃除に洗濯に飯まで作つてやった相手にその態度はないと思うぜ」

ぱたむと本を閉じ、魔理沙はちやぶ台にひじを突く。

「そうね、今日は筒でも食べたいわね」

「言つとくが虎の脂は品切れだぜ?」

「手に入つたらぜひ持って来てちょうだいね?」

「やめとくぜ。巫女のせいで幻想郷から竹林が消滅、とか一面に載るのは忍びないからな」

「私をなんだと思つてるのよ」

「貧乏巫女。……いや、赤貧巫女か?」

「く……」

言い返そうとして、あまりにも不毛な言い合いであ

ることに気付いた。

「ごろん、と仰向け。畳にひっくり返ると、天井の染みがひとつふたつ。」

「んー。まあ、慣れちゃったからいままであんまり気にしたことなかったけど、確かにだーれも来ないわね……」

「……いつも、こう、なのか……？ 本気で……？」

「不安げな魔理沙。ええいうるさい憐れむような目で見ろな。」

「癪、ただどあんたの言う通りね、このままじゃ……決めたわ」

「何をだ？」

「よ、と身体を起こし、こきこきと肩を鳴らす。」

「つまりよ。この神社がどうしてこう、その、世間様一般の基準と比較して、いくらか参拝客と称される層の立ち入りが極めて稀な状況にあるのかを検討してただけで、その結論がでたの」

「お、なんだ、博麗神社もいよいよ店じまいか？ まあ、あの客の入りじゃ時間の問題だろうと思ってたし、避けられないことなら思い切りは必要だよな。タイミングとしては悪くないんじゃないか。ははは——おうあ熱ぢゃあつ!？」

いかにも爽やかに笑われてムカついたので、魔理沙の頭の上で湯飲みをひっくり返してみたら、一端えらく喧しくなつてからすぐに少し静かになった。

「そうよ。この危急の事態を変えるには意識的な改革だけじゃだめ。もつと抜本的な制度改革が必要なの。これからは、神社もただ漫然と参拝客さんを待つてるだけじゃ駄目なのよ」

部屋の中をぐるぐると歩き回りながら、思案をめぐらせる。

「もつと積極的に、こつちから参拝客の首に縄かけて搔っ攫うくらいの勢いで前向きに信仰を集めるべきなのね。悔しいけれど早苗のところのやり方も一理あると思うわ。人の神社を乗っ取るうってくらいのあの強引さを見習うべきね。……ホント。考えてみればそれで解決じゃない。なんで今まで思いつかなかったんだろ？」

「……それやられかけてあの時にさんざんむかつ腹立ててたのはどこのどいつだ」

そんな事実もあったかもしれない。

「いいじゃない。どうせいかにも永遠の二番手っぽい色合いしてるんだから。フルーツフルーツ言つて不意打ちボム一発でやられるだけなのに妙に人気あるし」

「あー、悪いこと言わんからそのへんで自重しとけ霊夢？　なんかあったのか知らんが」

何を気にしたかごぼごぼと咳払いをする魔理沙。

「あとな、乗っ取るとか攫うとか、そういうのを世間様では悪徳というんだぜ」

「そんなことないわよ。あんただって本やら道具やら心やら処女やらいろいろ泥棒してるじゃない」

「最後のほうは断じて違うぜ!？」

「主に妹とか人形遣いとか図書館とか。最近は何童も餌食かしら。尻子玉抜こうとしたら逆に抜かれたなんて笑い話よねー」

「いやだからちよい待て霊夢っ！　いくらなんでも自重しとけ？　お前さっきからそれっぽいこと適当に言つてれば大丈夫だろう的に話してるだろ!？」

「そんな事ないわよ?」

「まっつっつっつたく説得力ないぜ!!」

暑苦しく詰め寄ってくる魔理沙。

「いいから。そんなことよりも、今はもつと大切なことがあるの。お賽銭とか」

びし、と空に輝く信仰の星をなんとなく気分的に指差して、胸に込み上げてくる熱い感動に浸る。

「私の名誉はそんなこと呼ばわりか。なあ、燃えてる

ところ非常に申し訳ないんだが、いい加減寒くなってきたんだが」

「なに？　あら魔理沙、どうしたのびしよ濡れじやない。大変、風邪引いちやうわよそんな格好したら。あったかいお茶とかいるかしら。厄除けのお札とかも必要よね。あ、ついでに無病息災ロゴ入りのTシャツとかも一緒にどうかしら?　いまなら友人特価で出血大サービスの三割増よ?」

「……あー。明らかに自分でやったって分かってるくせに金が取れると本気で思ってるところがなんというか、霊夢のすごいところなんだなとしみじみ噛み締めるところだ。あとその笑顔やめろ。取って喰われそうな気分になるぜ」

「そんな♪　褒めたって安くしないわよ♪　言ったでしょ、四割増し♪」

「さりげなく増えてるのがさらに凄いな」

差し出した手のひらをぺちんと叩き、魔理沙は風呂沸かしてくるぜ、と去っていった。

（了）

七 桃始笑

▲ 博麗神社 三月九日 ▼

喧騒の宴から一夜、明けて。

「は……」

境内と階段を掃き終えた頃には、お日様はそろそろ天頂近く。今日のお昼はなんにしようかと思いつつお茶を抱え縁側に腰掛けてみると、ふと青空に翳りを覚える。はてと見上げてみれば、空には一条の白雲が引かれていた。

箒に雲を棚引かせ、白黒の魔女は裏庭の真ん中にすくと着地する。

「相変わらずだらけてるな、霊夢？」

「……来るなりご挨拶ね」

うんざりと顔を上げ、周囲を見回し。

「これがそう見えるなら眼鏡でも掛けた方がいいわね。いい医者紹介するわよ？」

「不老不死はごめんだぜ。むしろそれで仕事してるように見えると言ひ張るのが凄いな」

「手伝いたいならいくらでも残ってるわよ、奥に」

肩越しに振り向いた奥の間には、山と詰まれた酒瓶に皿。食べ遺しこそないが、惨憺たる有様の宴の後。境内の掃除が現実逃避だというのは、いちおう自覚している。

「遠慮するぜ。ああいうのは庭師かメイドの仕事だ」
「妖夢は幽々子の世話で手一杯だし、咲夜は自分とこの分しかやらないのよ。正直猫の手も借りたいくらいなの」

「猫と同扱いは失礼だぜ」

「手伝わらないでしょ？」

「まあな」

胸を張って言われた。なぜか爽やかなまでに。

「この前のあれは特別サービスだからな。そんなに猫の手が欲しけりや式でも持てばいいじゃないか」

からからと笑い、魔理沙も隣に腰を下ろす。

貰うぜ、と許可も得ずに湯飲みを手を伸ばし、一息。

「そういや、猫の手で思い出したが萃香の奴はどうしたんだ？ それこそあいつに手伝わせりやいいだろうに。半分はあいつが呑んだんだから」

「覚えてないの？ あのあと地底まで付いてったじゃない。そのまま飲み比べしたみたいだね。朝帰り

したまま奥でぶっ倒れてるわ」

それに答えるわけでもないだろうが、ううう、と唸るような声が寝所から響いてくる。どちらかと言えはあまり人様に聞かせられない類の呻き声だ。

「鬼でも悪酔いするんだな……で、どっちが勝ったんだ？」

「一晩中呑み続けで、用意してた十斗樽ぜんぶ呑みきつて結局勝負つかずみたいよ」

「あー、あとで水でも持ってつてやるか」

「うええ……」

また答えるように響くうめき声に、魔理沙も苦笑。

「ともかく、少しは恩に着て欲しいわ」

「よし、じゃあそんなお前に魔理沙さんがいいものをやろう」

「なに、食べられるもの？」

「第一声がそれか。食えんことはないが止めといたほうが無難だぜ」

そういつて魔理沙が差し出したのは、小さな金魚蜂八分ほど水の入った丸いガラスのなかで、赤と白の更紗模様の金魚が水草を食み、くると弧を描く。

「ほれ、昨日の祭りで金魚すくいやってたろ。それでなよく考えたらうちで飼えんし、ここで飼っていい

か？」

「間に合ってるわ。酔いどれ鬼一匹で手一杯」

「むうー、そんなんと一緒にするなー」

どしん、という音と共に奥の襖ごしに抗議の声。一応聞こえてはいらないらしい。

「……大体、なんでいきなり私が出てきて飼ってやらなきゃいけないわけ？」

「きちんと世話してやれば恩返しに来るかもしれないぜ？」

「機でも織ってもらえばいいのかしら」

「そうだな。飯炊き掃除洗濯、雑用くらいはしてくれるんじゃないか？」

「あのねえ」

これが鯉なら後に竜になって、死んだ時にも生き返らせてくれそうなものだが。金魚となるとどうしたものか。

「うー、暗に鬼は役に立たないって言われた気がするぞー。あれかー、鬼の居ぬ間に洗濯かー！」

「はいはい、酔っ払いは黙ってなさい」

「横暴だー」

ごろごろ。どしん。

いつもの倍は酔ってる雰囲気だ寝所が揺れる。あの

分だとまた襖に穴でも開いただろうか。後で修理させておこう。

「まあまあ。金魚は縁起がいいんだぜ？ 海の向こうじゃ金余つて字で当ててな、千客万来と商売繁盛のお守りだぜ？ まあ、招き猫みたいなもんだ」

「……悪意はないと思っておくわ。餌代くらい持ちなさいよ？」

「それくらいはな。……つて何だその手」

「今月分」

「早ッ！」

「うるさいわね無いと飢えるのよ。貰えるものはいくらでも貰うわ。お守りのご利益とかそんなものよりも先に現実的なお金が欲しいの」

「もう少し言葉を選べ。せめて」

なお、萃香が余計に酔ってるのも、食べるものがないので空きつ腹を誤魔化しているためであつたりするが。

「糸ミミズ食つたりするなよ？」

「食べないわよ、鳥じゃあるまいし」

渋々差し出した小銭を魔理沙から受け取り、大事にサラシの中に仕舞う。

「じゃあ、それはとりあえずそつちの縁側にでも置い

ておいて。まさか床の間に飾る訳にもいかないですよ」

「応」

「で、臨時収入もあつたことだしお昼にしましょ。萃香、あんたも食べるんなら手伝いなさい」

「あーい……」

「ごそそと布団を這い出してくる萃香と共に、台所に向かう。」

「あんたも。自分の分くらい手伝つても罰は当たらないわよ」

「へいへい、分かったぜ」

答える魔理沙に合わせるように、鮮やかな赤白の長い尻尾を躍らせて、金魚は狭い金魚鉢の水面を揺らし、ちやぶんと跳ねた。

日本の 室原の毛桃 本繁く
言ひてしものを 成らずは止まじ

(読人不知)

桃花染めの 浅らの衣 浅らかに
思ひて妹に 逢はむものかも

(読人不知)

【第2刷 あとがき】

はじめまして。あるいはお久しぶりです。お手にとつて頂きましてありがとうございます。銅おりはと申します。

本書は第六回博麗神社例大祭で頒布した当サークルの初の東方SS本……の第2刷となります。

何から何まで手探り状態のなかでしたが、春の例大祭では予想外の「ご好評をいただき完売となりました。ありがとうございます。」

本文中、未熟なりに季節感を出そうと四苦八苦してみたり、それなりに細かい伏線なども張ってみました。無駄に分かり辛くなつたばかりのようでもありません。もっと精進したいと心新たにしています。

今回の再販に当たつても、監修として白身氏、デザインと装丁にはRizza氏にお手伝いいただきました。この場を借りて深く感謝を申し上げます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

「博麗神社日々随録 雨水（啓蟄）」第2刷

発行 平成21年6月21日 第一回東方崇敬祭

オルハザカサンバンチ
折葉坂三番地

あかがね
銅 おりは

<http://oruhazaka.blog.28.fc2.com/>

<http://members.jcom.home.ne.jp/oriha/index.htm>

▼コメット[comet]

金魚の一種。アメリカで交配された琉金の突然変異個体とフナの交配種。白地に朱の更紗模様を持ち、生命力が強く動きが活発。吹き流しのような特徴的な長い尾を引いて泳ぐ姿から「彗星」を意味する名前を付けられた。

▼もも【桃】(モモ 学名 *Amygdalus persica*)

バラ科モモ属の落葉小高木。中国原産。春に五弁あるいは多重弁の花を咲かせ、夏には甘味の強く汁気の多い柔らかな実をつける。食用、観賞用。女性の象徴であり、邪気をはらい長命をもたらすとされる。花言葉は「天下無敵」「チャーミング」「私はあなたのとりこです」。